

## A D H D への理解を深めるために

高三

私にはA D H D（注意欠如陥・多動症）の症状がある成人の兄がいます。A D H Dは主に多動・衝動の症状と、不注意の症状が同時に起こる発達障害のことを指します。不注意の症状例としては気が散る、物をなくす、約束を忘れてしまうなどがあります。移動・衝動の例としてはじっとしているのが苦手、立ち歩いたりしてしまうなどがあります。この例を元に私の兄は病院から三歳の頃にA D H Dと診断を受けて、小学生のときから去年まで症状を一時的に抑えるカプセル状の治療薬「コンサータ」を服用していました。

幼少期の兄は落ち着きがなく、とても活発な性格でした。兄がA D H Dと診断されたのは三歳の検診で、軽度のA D H Dだということがわかりました。両親はまだ軽度のA D H Dならば周りの行動とさほど変化はないだろうと考え、小学生まで薬を服用していませんでした。しかし小学校で集団行動が始まるにつれて授業中にいきなりシャツ

を脱いでマンガの台詞を言い始めたり、友達の給食着をトイレに流してしまったりと友達や先生をよく困らせるようになりました。その事件があり、両親は「周りに迷惑をかけないよう。」と兄に薬を飲むよう説得しました。薬を飲んだ兄は大人しくなり、その後の集団生活も問題なく過ごしていましたが、その結果、友達との交流が少なくなっていました。活発だった性格から百八十度変化し、大人しい性格に変わってしまった兄はクラスメイトに相手にされない場面がよくあったそうです。そんな環境に耐えられなくなった日は、薬を飲まずに学校へ向かう日もありました。治療薬には依存性がありますが、兄は薬に頼らず自分を表現したいという意思が強かったのです。それでも両親は「相手に怒られると自信をなくしてしまう」という二次障害を防ぐためにたびたび薬を飲むよう兄を説得したそうです。

兄は軽度のA D H Dで飲み始めた頃から去年まで薬量は変化していませんでした。現在は成人になり薬は服用をしなくても支障なく暮らせるという医師からの診断を受け、服用を去年で終えめました。しかし、家の中を立ち歩いたり、家族内でコ

コミュニケーションを積極的にとったりすることは少なく、重要なことを両親に話し忘れてしまうことも、まだあります。そんな兄でも二年前から会社員として働いています。職場環境が良く、職場の人たちからの理解も得られています。症状について必ずしも理解してもらえないとは限らないので、本当にありがたいことだと私も思いました。

「この人はADHDだから」というくくりで障害者としてまとめずに、症状について理解するべきだと私は思います。なぜなら私たちも自律神経やホルモンバランスの崩れで似たような状態が十分起こりうる可能性があるからです。私たち自身も、忘れ物をする、約束を忘れてしまう、相手に適切な言葉をかけられない、伝えるべきことを伝え忘れるなど、一度は経験したことがあると思います。このように、私は人間誰しも全て完璧ではないと思うので、今まであまり兄の症状を特別だと思うことはありませんでした。家族である私からすると、兄は私と一緒にマイペースな人物だと感じていたので、今までは人権作文のテーマにしたことはありませんでした。しかし、今回のテーマで発達障害のことについて調べてみて、家族の

私でも兄に対して配慮するべきことや、理解するべきだと思いうことがいくつもありました。特別扱いをせず、すぐに怒らず注意をしたり、落ち込んでいたらポジティブな言葉をかけたりするなど、私たちが普段いろい로운人に接するような行動をとるべきだと思いました。お互いを思い、たとえ最も適切な対応はできなくても、「しようとする」という意識がとても重要であると私は思います。